吉良川の町並みを守り続けるために

2025 年度京都橘大学

工学部　建築デザイン学科 卒業論文
a602022280　中野妃彩

目次

1. 研究の背景・目的. 3
2. 吉良川地区について. 3
2-1. 吉良川地区の家の特徴. 4
2-2. 吉良川地区の町並みの特徴. 5
3. 先行研究 9
3-1. 町並みの維持・継承に関する研究. 9
3-2. 過疎地域における関係人口に関する研究. 9
3-3. 重要伝統的建造物群保存地区と未選定地区の地域居住に関する研究. 9
3-4. 歴史的街並み景観にみられる地域アイデンティティの創出メカニズムに関する研究
. 10
3-5. 町並み保存の取り組みと住民意識に関する研究. 11
3-6. 先行研究から得た知見. 11
4. 事前調査 12
5. 調査方法と調査結果. 13
5-1. 質問項目　特定非営利活動法人吉良川町並み保存会　(2025 年 8 月 23 日~11 月 13 日)
. 14
5-2. 質問項目　地域住民(2025 年 8 月 23 日~11 月 21 日). 16
5-3. 質問項目　室戸市役所(2025.8.26~12.5). 18
6. まとめ 20
6-1.町並み保存会から分かったこと. 20
6-2. 地域住民から分かったこと. 21
6-3. 市役所から分かったこと. 22
7. 結論 22
参考文献 23

1. 研究の背景・目的

近年、全国各地で歴史的な町並みの保存や活動が注目されている一方で、地方においては少子高齢化や若年層の都市部への流出が進み、伝統的な景観や建造物の魅力を伝えていくことが困難になっている。建物の修繕や維持管理を担う後継者不足、住民の高齢化による地域活動の停滞が課題として挙げられる。

高知県室戸市吉良川地区は国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されているが、県の最東部に位置し高知市内からは車で 100 分程度の時間がかかる。JR からも遠く交通の便もよくない。そのため観光客の訪問は比較的少なく県内でも重要伝統的建造物群保存地区の存在を知らない人が多いのが現状である。そのような場所にある重要伝統的建造物群保存地区を地域資源として県内外のより多くの人に知ってもらい、地域住民は保存・継承するにあたって何かできることはないかと考えたのが研究の動機である。また同じ高知県東部に住むものとして重要伝統的建造物群保存地区がある場所を誇りに思い、多くの人に知ってもらいたいと考えている。本研究では、高知県室戸市にある吉良川地区の重要伝統的建造物群保存地区を対象とし、それがあることによって住民にとってどのような価値や意識があるのかを調査する。また、地域の観光資源としての活用の可能性はどのようなことができるのか調べる。保存活動について若い人の担い手や後継者はいるのか調べる。

2. 吉良川地区について





図 1,2 吉良川地区の町並み(2019 年 11 月 24 日撮影)　　(室戸市役所より)

吉良川地区の町並みは、備長炭の繁栄とともに先人の手によって建築された。藩政時代より林業が盛んで、明治期になると木炭の生産が始まった。大正時代さらに製炭技術が向上し、良質な備長炭を産出したことから、これらを扱う商家や回船問屋が隆盛を誇った。室戸市吉良川地区の町並みは、平成９年（1997 年）10 月高知県で初めて国の文化財である「重要伝統的建造物群保存地区」に選定された。旧街道に沿う浜地区と山側の丘地区とで構成され、それぞれに吉良川地区ならではの伝統的な建築様式が見られる。坂の上の地域(丘地区)と坂の下の地域(浜地区)では建物の高さが統一されている。明治時代から昭和初期に建築された建物を中心に、東西約 1km にわたって軒を連ねる風情ある町並みの佇まいが今も残さ

れている。

2-1. 吉良川地区の家の特徴

吉良川地区の家のほとんどが昔商売をしており、表側が店舗、裏側に住民が住む家があり、今も昔のままの状態で残っている。多くの人が入れるように玄関がとても広い造りになっている。それぞれの家の天井部分には必ずはしごがついており、冠婚葬祭や年に数回集まるとき用に普段使わないものが収納されている。この収納部分は、「つし２階」と呼ばれ中 2 階になっている。吉良川地区の家はどの家も大体同じ内装になっている。





図 3 玄関部分、図 4 家の内装(2025 年 8 月 23 日撮影)







図 5,6 はしごが備わった家(2025 年 8 月 23 日撮影)図 7(室戸市役所より)

2-2.　吉良川地区の町並みの特徴

(1)水切り瓦

高知県は暴風雨地域であり、吉良川地区は平野部の南北延長が短いため、その傾向が顕著である。こうした自然環境ゆえに、水切り瓦という地域独特の工法が発達してきたといわれている。水切り瓦は、もともと妻壁面の異種仕上げ材の水平水切りとして始まったものと考えられているが、壁面に取り付けた小さな庇のような形状は直接雨掛りを避けて壁面を保護する役目を果たす。図 8 の写真より水切り瓦が妻壁面に落とすダイナミックな陰影は古くから建物のデザインにおいて重要な位置を示している。また、図 9 の水切り瓦の写真をよく見ると漆喰部分がとてもきれいに残っており、水切り瓦が水をしっかりと切っていることが分かる。このような理由から水切り瓦は好んで施工されるようになった。また、雨仕舞のための建築材料であった水切り瓦を町並みデザイン要素として昇華させた先人の知恵は、現在も受け継がれている。





図 8,9 水切り瓦(室戸市役所より)

(2)いしぐろ

吉良川地区には「いしぐろ」と呼ばれる石垣がたくさんある。台風が頻繁に襲来してきた時の防風対策として台風の強い風から家を守るためのものである。軒下ほどの高さで家の周辺を囲むように築かれている。河原や浜の石を半割にして規則的に積み上げた様は、防風機能だけでなく、繊細で美しい景観をつくり出している。




図 9,10 いしぐろ(室戸市役所より)

(3)土佐漆喰で塗られた白い外壁

一般に漆喰と呼ばれるものは、左官用の消石灰に砂、のり、スサを加え、水ごねしたものをいう。しかし、土佐漆喰は地灰(塩消石灰)にネズサ(発酵処理した藁スサ)を加え、水ごねしたものであり、のりを含まないのが特色だ。のりを混入しないので、塗り付け後、水に触れても戻りがなく厚塗りが可能で消石灰が塩焼き、オーブン昇消化であるためきめ細かく仕上がる。塗り付け後はクリーム色で時間が経つと白色に近づく。吉良川地区に用いられている土佐漆喰は何度も塗り重ね、手のひらで擦り付ける事で光沢を出している。粘着力があり、防火・防水・塩害に強い。

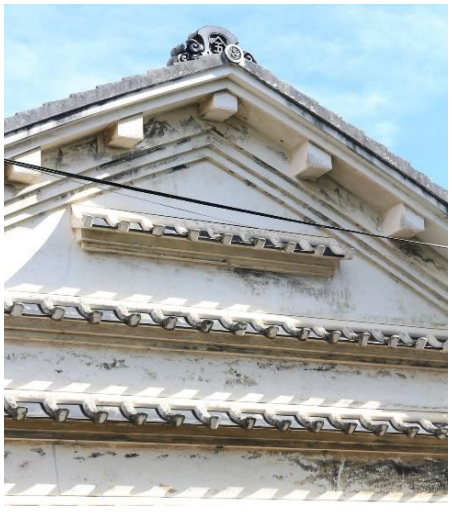



図 11,12 土佐漆喰で塗られた建物(室戸市役所より)

(4) 虫籠窓

天井裏にある中２階の部屋(つし２階)は使用人の物入れや倉庫として使われていた。この部屋の換気や明かり取りのための窓を虫籠窓という。鉄の扉は密集した町家の防火対策や防犯対策になっている。各家によってデザインが異なる。



図 13 青銅でできた虫籠窓(室戸市役所より)



図 14 大きめの虫窓(室戸市役所より)

(5) なまこ壁

建物の隅や壁の腰の部分など特に風雨に弱い個所を守るため、平瓦で壁面を補強したものを腰瓦という。腰瓦の目地を蒲鉾型の漆喰で仕上げたなまこ壁は、色のコントラストと幾何学模様が町家の外観意匠の重要的な要素となっている。







図 15, 16, 17 なまこ壁(室戸市役所より)

(6) 左瓦

一般的な瓦は「へ」の字を書くような形をしている右瓦だが、吉良川地区の町並みの瓦は逆向きの左瓦がある。右瓦だと台風による横殴りの雨や暴風の影響をうける。それを防ぐために反対向きの左瓦が存在している。家の建つ場所によって風の強く吹く方向は異なる。そのため、吉良川の町並みでは風が吹き抜けていく方向に沿って瓦を置いている。



図 18 左瓦（室戸市役所より）

(7) レンガ

かつて吉良川の町並みから関西へ土佐備長炭を輸送し、帰りにレンガを積んで戻ってきていた。その名残で町並みにはレンガが使われた壁がある。町並みの中でレンガを用いた建物も重要伝統的建造物群保存地区の保存対象になっている。





図 19,20 レンガを用いた建物（室戸市役所より）

3. 先行研究

3-1. 町並みの維持・継承に関する研究

先行研究の１つは「増田重要伝統的建造物群保存地区の維持・継承に関する基礎研究」という論文だ。秋田県横手市にある増田重要伝統的建造物群保存地区を対象として歴史的町並みが直面する後継者不足・空き家の増加に対して住民がどのような意識を持ち、町並みを継承していこうとするのか明らかにした。聞き取り調査の結果から伝建地区選定をきっかけにこれまで維持が負担であった内蔵を次世代に継承していきたいという思いや観光地化をきっかけに自分たちが主体となったまちづくりを行いたいといった積極的な意見が住民から得られている。また、町並みへの誇りや地域の外から人が訪れることで生まれる交流の機会を価値として捉えている。その一方で、伝建地区を形成する建物は規模が大きく、費用がかかるため所有や個人での維持・管理は難しい。伝統的建造物の維持・管理のための経済的負担や行政に対する不安が見受けられる。さらにアンケート調査の結果から多くの世帯で建物の名目上の継承者は決まっているものの、継承者の具体的な帰郷予定が立っていないといったケースが多いことが明らかになった。このことから、住民の保存活動や観光地化を行いたいといった意識は高いものの、実際の行動にはギャップがあることが分かった。

3-2. 過疎地域における関係人口に関する研究

「広島県呉市豊町御手洗における 地域づくりに参画する関係人口に関する研究 」では、広島県呉市御手洗を対象に関係人口を「特定の地域に継続的に関心を持ち、関わるよそ者」と定義し、地域づくりにかかわる関係人口の意義や役割を考察した。御手洗は戦後、商業地としての力は弱まるものの、港町や歴史的な地割、景観が残されており 1994 年に重要伝統的建造物群保存地区に選定された。2008 年に「安芸灘とびしま街道」が開通し、島へのアクセスが改善された。高齢化と過疎化が進行しているが、U・I ターン者も増加しており、複数の関係人口も確認されている。御手洗では多くの地域組織が活動していて自治会や「重伝建を考える会」のほか、観光事業を行う合同会社やイベント運営などの実行委員会が活動している。合同会社は 6 か所の空き家をカフェ、ゲストハウス、シェアハウスなどにリノベーションし、これまでこの地区に見られなかった形態で活用している。関係人口の増加は、複数の空き家解消や活用につながっている。一般に、空き家をその所有者は地縁のない「よそ者」に貸すことを躊躇する人が多いが、御手洗では「よそ者」が住民や地縁のある関係人口と活動することで、賃貸が進み、結果として空き家の活用が進んでいる。また、関係人口によって、それまで行われていなかったユニークな活動や既存の活動の活性化が見られ、地域活動が活発になっている。ただ、住民や関係人口の考えや理想は多様であるため、合意が難しく、それぞれの活動が一体のものとなっていない点が残る。しかし、それぞれが自分の範囲でできる活動を主体的に行うことで地域に関わる主体が増え、持続可能性が高まっているといえることが分かっている。

3-3. 重要伝統的建造物群保存地区と未選定地区の地域居住に関する研究

「歴史的町並みを活用したまちづくり実施地区における地域居住の維持 重要伝統的建

造物群保存地区と未選定地区との比較分析」では、重伝建地区全 88 地区・未選定地区 80 地区(2010 年 12 月調査時点)を対象とし、人口の残存率やまちづくり事業の取組み状況を比較した。アンケート調査より、重伝建地区では地域の歴史・文化や景観の美しさの保全を目的として町並み保存を始めたものの、現実的な問題として建物の老朽化・耐震などへの対策や歴史的町並みや伝統的建造物への誇り・愛着を醸成し居住意欲を高めていくこと、コミュニティの活性化が必要であることが示された。一方で、「保存を行う主体として当てはまるもの」を時系列ごとにみると、時系列を追うごとに「住民と行政が協働」の例が多数となっており、住民と行政どちらもが熱心に活動していることが分かった。修理・修景の際のデザイン協議・指導等についても専門家だけでなく、市町村と住民と共同で立ち上げた組織で行うとすることが多いと分かった。未選定地区において、伝建調査から経過年数と伝統的建造物の残存率との関係をみると、時間の経過に従って伝統的建造物の解体の進行を読み取ることができた。重伝建地区・未選定地区を含む市町村全体の人口残存率及び地区・市町村全体の人口残存率の比率の分布をみると市町村全体は倍増しているとこから急減しているとこまである中、地区人口は概ね市町村全体よりも人口残存率が低い傾向にある。重伝建地区の選定の有無に関わらず、歴史的町並みを有する地区の多くは、同市町村内の他地区と比べて居住人口が減少している。次に、両地区において、まちづくりに取り組む中で再生した・温存されていると実感する地区固有の産業・伝統文化などをみると地域の祭り等の伝統行事は残っていることが多く、歴史的町並みの保存が地域へのアイデンティティの確立に寄与する。しかし、こうした町並み保存に結びついていない地区も多く存在している。重伝建地区に選定されることで歴史的建造物の修理修景が進み、保存・維持にも効果が高いが、地区の人口維持、すなわち地域居住の維持という点では関連性は薄く、貴重な歴史的資源を保有しながらも地域の人口減少という課題は多くの地区で認められた。重伝建/未選定にかかわらず農村漁村過疎地域に立地する地区の場合は、UIJ ターンや集落維持をテーマとした農村計画研究等で明らかにされてきた、立地条件や資源保有の課題(居住維持要件)は共通であることが見出されている。一方で、優れた歴史的資源を有する地区は、外部からの移住者にとっては居住意欲を支える優位な条件となり得ている。歴史的な町並みという資源に限らず、風土的な要件を取り入れた地域居住維持の方策の検討は重要な視点であると考えられた。

3-4. 歴史的街並み景観にみられる地域アイデンティティの創出メカニズムに関する研究

「歴史的街並み景観にみられる地域アイデンティティの創出メカニズム」では、景観を望ましい形で保全するためには、地域アイデンティティの創出メカニズムを知り、住民に適切な地域アイデンティティを根付かせるような方法を考えることが不可欠だとした。福島県の南会津郡に位置する宿場町「大内宿」と山村集落「前沢」を事例にし、そこから生まれるアイデンティティを比較し望ましい地域アイデンティティを創出する保存方法を提案することを目的とした。分析の結果、「大内宿」では観光地化による経済効果を追求し「生活できる」という実感から経済的なアイデンティティが創出されている。これに対し、「前沢」

は景観保全に視点を置き、観光地開発を行わなかったため経済性に基づくアイデンティティは低いままだった。しかし、行政が住民を巻き込み、政策を実施することで公共性によるアイデンティティが生まれた。また、住民同士の関係性や共有意識の関係性や共有意識といった社会性も重要であり、街並み景観が保全されるものだと考えられている。経済性・公共性・社会性によって創出される地域アイデンティティは、それぞれ独立したものではなく、相互に関連がある。3つのうちどれか1つに頼らずに、それぞれのメリットを最大限に発揮し、デメリットを抑え、行政と住民が一体となって複合的な対策を取ることで、当該地域の特性に合わせた地域アイデンティティが創出され、歴史的街並み景観を望ましい形で継続的に保全することができると考えられている。

3-5. 町並み保存の取り組みと住民意識に関する研究

「重要伝統的建造物群保存地区における町並み保存の取り組みと住民意識：群馬県中之条町赤岩地区を事例に」によると群馬県吾妻郡中之条町赤岩地区を対象とし、現在の町並みの取り組みや住民意識を明らかにするとともに、今後どのようにして、町並み保存をしていけばいいのか考察をした。行政が建造物の修理・修景の補助金を出し昭和30年代まで残っていた茅葺き屋根の民家に戻していく取り組みを行っている。しかし、補助金が 90%出るといっても金額には決して少ない金額ではなく、住民はあまり快く思っていなく行政のひとり歩き状態になっているのが現状であり、課題となっている。取り組みとして、重伝建地区に選定されてから住民約 6 名が交替となって町並み案内のガイドを行っている。町並み保全における取り組みの課題として、ガイド部の年齢が高く高齢化が把握できた。他の取り組みとして、「10年後の赤岩を考える会」といった委員会の代表、中之条町、群馬県が構成員となり、活性化に向けて活動が行われていることが分かった。建物の修理・修景を行う際に「今の姿」を保存するのか「昔の姿」に近づけていくのかについて協議された。審議会では「昔の姿」に近づけていくことが決まったものの、「昔の家は住みにくい」といった意見や『お金がかかるので、住民の意思で「昔の姿」か「今の姿」を保存すればよい』などと心から納得できていない住民が多いと明らかになった。また、町並み保存に関する行政の対応に関して、補助金の少なさや保存計画が伝わってこないと住民が感じている部分があり、行政に対していいイメージを持っていないことが述べられている。アンケート調査より重伝建地区の選定を受けて「町並みを残したいという思いが強くなった」や「住民同士のつながりが強くなった」という回答は赤岩地区に置いて、少なかったことが分かっている。高齢化により、10年後や20年後を見据えると町並み保存の意識がある人が少なくなることが恐れられている。今後は定期的にまちの在り方につて住民と行政の意見交換や住民同士での話し合いが重要であると言える。定年退職後も赤岩地区で暮らしたいと思ってもらえるように福祉制度の充実や雇用の場を提供する必要があると示している。

3-6. 先行研究から得た知見

1. 町並みへの住民の保存活動や観光地化の意識は高い。しかし、建物の維持・管理や行政に対する不安が見受けられている。また、建物の継承者は決まっているものの、継承者の具

体的な帰郷予定が決まっていないことが多く、住民の意識と実際の行動にはギャップがある。

2.　空き家を所有者に地縁のない関係人口に値する人に貸すことで地域活動が活発になり、自分のできる範囲で主体的に活動することで持続可能性が高まっている。

3.歴史的な町並みを有する地区の多くは、同市町村内の他地域と比べて人口が減少している。歴史的な町並みの保存が地域へのアイデンティティの確立に寄与する。農村漁村過疎地域に立地する重伝建地区、未選定地区は立地条件や資源の保有が課題である。歴史的資源を有する地区は外部からの移住者の居住意欲を支える優位な条件である。

4. 経済性・公共性・社会性のどれか1つに頼らずに、行政と住民が一体となった複合的な対策を取ることが地域アイデンティティを生み出すことに繋がっている。また、それが歴史的街並み景観を継続的に保全することに繋がると考えられている。

5.　町並みガイドや町並み保存の意識がある人の高齢化が把握や住民同士の意識のばらつき、行政の対応への不満が見受けられた。

4. 事前調査

本研究に先立ち、事前調査の一例として、令和7年7月4日に立命館朱雀キャンパスで開催された文化庁主催の「伝統的建造物群保存地区制度創設50周年記念シンポジウム～まちなみを紡ぐ人々のあゆみ～」に参加した。國學院大學の下間久美子氏による基調講演では、制度創設から50年の歩みを振り返りながら、今後は制度そのものよりも「地域の人々がどのように関り続けるか」が重要であると指摘された。また、時代別の課題として平成～令和の時代には人口減少や高齢化、観光地化などの課題に対しても地域の主体的な関与が鍵になると述べられた。さらに、取り組み発表では角館(秋田県)、妻籠(長野県)、白川郷(岐阜県)、祇園(京都府)、萩(山口県)の全国の伝統的建造物群保存地区における取り組み発表が紹介された。角館では住民による清掃活動や修景への意識づけ、防災活動が長年にわたって続けられており、行政頼りではなく住民自身が地域の景観を誇りとして守り続けている姿勢が印象的であった。妻籠では「売らない・壊さない・貸さない」という三原則を掲げ、町全体で統一した保存方針を定めたことで、全国に先駆けて住民主体の保存活動を成功させた事例となっている。このような住民主導の保存活動は、地域内の合意形成を促し、外部からの観光客に対しても一貫した町並みの魅力を伝える要因となっている。一方で、白川郷や祇園、萩市などの事例では観光との共存が大きな課題として示された。白川郷では世界遺産登録以降、観光客の増加に伴い、住民生活とのバランスをとる必要性が生じた。その中で、保存組合が中心となって建物修理や防水訓練、景観維持のルールを設け、地域全体での保存体制を整えている。祇園では住民の高齢化や店舗の入れ替わり、業務の多様化により従来のしきたりが伝えられない状況になっている。また、観光客があふれて景観が損なわれている。従来のルールの押し付けではなく、臨機応変に対応し、マナー啓発を行うために伝統的な町並みと商業活動の両立が進められている。萩市では武家屋敷や町人家など多様な景観を持つ地区を広域的に保存し、住民を対象とした座学やフィールドワークを中心に愛着と誇り

を持つ町並みにする取り組みが整えられている。これらの 5 つの地域の事例に共通するのは、保存を「行政が行うもの」ではなく「地域全体が担うもの」として位置付けている点である。住民が主体的に保存活動に関わることが保存地区を支える基盤となっていた。また、観光による経済効果を活かしつつも、生活環境を守るためのルールづくりや意識啓発が重視されている点も共通している。

これらを踏まえると、室戸市吉良川町においても、こうした他地域の取り組みから学ぶ点は多い。吉良川地区も重要伝統的建造物群保存地区に選定されているが、少子高齢化や地域住民による保存活動の担い手不足が深刻化している。他地域の取り組みを参考にすることで、吉良川地区における「住民主体の保存」と「行政支援」による体制づくりが町並み保存の鍵になる。

加えて、過去に吉良川地区を訪れた際の経験と令和 6 年に室戸市が作成した資料を活用する。令和元年 11 月 24 日に訪れた際の感想として吉良川地区の建物の建築的特徴と地域の暮らし、歴史が感じられた。町並み保存会の方のガイドでは町並みについて詳しく話を聞くことができた。水切り瓦やいしぐろなど自然環境に対応した建築が連続して残っており、保存の価値を感じた。一方で、訪れた時は吉良川地区のイベントである「ふるさと市」が開催されていた。そこでは休日昼間に行われているイベントにしては客が少ないように感じた。また、イベントの中心となっている方は年配の方が多かった。ここでは観光客の少なさやイベントスタッフの高齢化や世代交代としての難しさが把握できた。室戸市が作成した資料から吉良川の町並み形成や地域文化の歴史にとって重要となっているものに 2 年に 1 度行われる御田祭や毎年秋に行われる神祭があることが分かった。また、住民等の取り組みとして毎年 3 月に「ひなまつり」が行われる。家の玄関先や通りに面した旧店舗の座敷など、いたるところに雛人形が飾られ町並みを華やかに彩る。「ひなまつり」以外にも「七夕」、「ふるさと市」など吉良川地区の町を舞台に様々な行事が行われている。さらに、地域おこし協力隊が SNS 等を活用し、吉良川地区の見所や町の情報を発信している。他にも町の特産物を利用したワークショップやイベントを開催するなど地域外の方に訪れてもらう取り組みを行っている。小学校と連携し、総合的な学習の時間で吉良川のまちなみを使った地域学習を行っている。事前調査を通して、「保存・活用・住民の取り組み」によって地域文化を活かしたまちづくりがすでに行われていることが明らかになった。今後は、この 3 要素がどのように連携しているのかを検討する。自分が訪れた際に感じたことをどうすればよりよく改善できるかを検討する。

5. 調査方法と調査結果

本研究では、主にフィールドワークとインタビュー調査を行った。フィールドワークでは、特定非営利活動法人吉良川町並み保存会の観光ガイドツアーに参加し、お話を伺った。インタビュー調査では地域住民の方には保存会の会長の方の案内に元、飲食を交えた憩いの場において約 10 名の方に直接インタビューを行い、事前に準備した質問項目に答えていただいた。また当初、室戸市役所への訪問調査を予定していたが、担当部署の業務上の都合によ

り訪問での調査が難しい状況となった。そのため、市役所担当者とメールでやり取りし、質問に答えてもらいながら内容の確認や追加調査にも対応していただいた。保存会・地域住民の方にも追加調査はメールで対応していただいた。

5-1. 質問項目　特定非営利活動法人吉良川町並み保存会　(2025 年 8 月 23 日~11 月 13 日)

① イベントを行うことでどのくらい集客が出来たか

「ひなまつり」が一大イベントで町外からも多くの人が訪れる。「ひなまつり」は平成 10 年 3 月から毎年開催。室戸市＋中芸地区(安田町、田野町、奈半利町、北川村、馬路村)の共同で開催している。コロナ禍の時は、3、４年間開催できなかった。「ふるさと市」は平成 26 年 6 月から毎月行っていて 200 人くらい集まっていた。今は年 2、3 回の実施で店はほぼ出ていない。地元客の 100 人くらいが参加している。衛生法が厳しくなり、漬物など以前販売していた食べ物が出店できなくなった。食べ物を出店するには保健所を通さないといけなくなりそれにお金がかかることで出店を諦める人が増えた。個人での出店はなくなり、現在出店しているのは婦人会のみ。地元の祭りの「神祭」・「御田祭」はカメラが来て取材に来る。昔から出店を買いに来るが演目はほとんど見ないで帰る人がほとんどである。子供授かりの祈願の祭りで今は祭りに 5 人くらい子供を授かりたい人がやってくる。

②イベントを始めたきっかけや目的は何か

観光誘致、地域交流、地域活性。吉良川町には、国の重要無形文化財に指定の「御田祭」、国で残したい「秋の神祭」と大きな祭りがあるが、「ひなまつり」を開催することにより、もう１つ大きな祭り(イベント)となった。

③イベントを通して町並み保存の意識は変わったか

地元の人々間の交流・自信がつく。他市民町より、見物客が多いことから、住民の方たちのおもてなしの心が変わった。

④イベントを開催することで経済効果はあったのか

「ひなまつり」ではあり。

⑤経済効果よりも「人のつながり」や「地域の活気」など、目に見えない効果を感じることはあるか

元々、祭りや浜清掃、災害の訓練で地元の繋がりは強い町である。

⑥イベントに訪れた客の年齢層

「ひなまつり」は「若い人も来るが年配層が多い。「ふるさと市」はほとんどが地元の年配層である。年に 1 回ほど落語家を大阪から招いて公民館や御田八幡宮の拝殿で公演を行っている。60 人ほど年配の方が訪れている。

⑦イベントを開催していて一番苦労することは何か

高齢化で人手不足なこと。ひなまつりは地域住民の助けがなければ出来ない。

⑧保存会を立ち上げた当初の目的は何だったのか

選定を受ける目的のため。(平成 7 年「白壁を守る会」を立ち上げる。

⑨吉良川地区でいう「景観を守る」ということは具体的にどういうことだと考えているのか

自然災害から家を守る方法。いしぐろで建物を囲い、強風や高潮から守る、水切り瓦や土佐漆喰を用いた外壁によって雨水の侵入を防ぐといった景観と防災が一体となり伝統的な構造を守ること。

⑩保存会はNPOに登録されているがどこから利益を得ているのか

どこからも得ていない。保存会の維持・活動費は国から得ている。年間 178 万円おりている。178 万円では正直足らない。ものをつくって売ることも試してみたがそれだけでは難しい。ガイド料、まちなみ会員の会費で成り立っている。市からの恩恵がなくて困っている。

⑪保存会を継ぐ人や担い手はいるのか

保存会の役員は12名いる。保存会を継ぐ人がいなく、これは室戸市吉良川地区だけではなく重要伝統的建造物群保存地区の全国的な問題だと危機感を持っている。ガイドをする人は7名から2名に減った。ガイド研修を毎年行っていて室戸市内の若い人が研修を受けに来ている。しかし、ガイドとしてはもう少し技術がほしいといったところである。これからもっとガイドとして育てあげていくことが課題である。

⑫保存会の日常的なスケジュール

退職している人もいるが、他に仕事を持っている人がほとんどである。昼間に集まることが出来ない。完全にボランティア的な感覚である。

⑬観光ガイドツアーは年に何人くらい参加してくるのか

今は年間30件弱、500人くらい。コロナ前は1度に30〜40人の団体で来ていた。

⑭観光ガイドツアーに参加する客はどこから訪れたか

大阪の一般客が圧倒的に多い。コロナ前は阪急電鉄ツアーのツアーで大勢の客がガイドに訪れていた。また、阪急電鉄のツアーは保存会が企画したのではなく、旅行会社が企画したツアーガイドなので今のところ再開催の予定はない。

⑮観光ガイドツアーに参加する人の目的

9対1くらいの割合で観光を目的として訪れる人の方が勉強で訪れる人よりも多い。

⑯家を宿泊や店舗として扱う予定はあるのか

宿泊は保存会主催ではないが個人で行っている。これからやる予定の家もある。保存会としては経営が出来なく、維持・管理が難しい。

⑰若者や移住してきた人との関りはあるか

備長炭の勉強をするために移住してきている人が4、5人いる。吉良川に定住してみたいという人もいる。貸す家もあるし貸す人もいる。しかし、室戸市が費用を家の改修や水回りの修理にかけてくれない。移住促進をしたいと言いつつも行動になかなかうつしてくれないことが悩みである。家主からも家を貸すことの了承を得ている。市から頼まれて貸すことのできる家のアンケート調査を何十年も前から行ったものの、それを市に提出すると答えが返ってこない。保存会としては、どうして市から頼まれたことを行ったのに答えが返ってこないのか不満に思っている。

⑱若い世代に期待していることはあるか

保存会の後を継いでもらいたい。若い世代の人たちは吉良川の町並みも吉良川地区の重要的建造物群保存地区について値打ちや良さを分かっていないと感じている。

⑲地元の人は保存活動を知っているか(関心度・情報の届き方)

知っていて関心度が高い人が多いが、無関心の人も当然少なくともいる。イベントがあるときはポスターやFacebook、年1回発刊の「町づくりかわら版」にて情報を発信している。

⑳地元小学生はどのような姿勢で地域学習の授業に取り組んでいるか

地元の小学3、4年生が秋に行われる神祭に携わっている。神祭のための歌を教えに行っている。市教育委員会の方達が携わり、小学生を対象にマップを作り、町並み内での古井戸・飾り物等、普段目につきにくい物等、隠れている物を宝探しの要領で探す「吉良川みっけ」という町並みを利用したゲームを行っている。保存会の方が小・中学校に地域学習の一環として訪れて教えている。発表会でも吉良川地区のことを発表している。生徒たち皆が積極的に学んでくれていて保存会としてはとても関心している。

㉑防災への取り組みはどのようなことを行っているのか

室戸市の防災リーダーが主体となって防災活動を行ってくれている。防災訓練は年に2~3回程度行っている。吉良川地区の町並みは家と家との距離が近いが土佐漆喰で塗られた壁が防火のためになっており、火災が起きていない。保存地区外での火災は何件かおきているが、保存地区内の火災は覚えがない。防火意識は昔から強い。しかし、南海トラフ地震が来ると耐震補強をしていないのと海からの距離が近いので無くなってしまうかもしれない。

㉒保存会として行政や外部支援に求めたいことはあるか

イベントの計画からの協力や当日の協力など。

㉓今後の保存活動の目標は何か

観光地化は目指していなく、そのままのありのままの状態を保っていきたい。現状維持が一番の保存活動である。というのも、吉良川地区に訪れた川越の町並みの会長の方の話を聞くと、川越は家を見るより観光客をみているような感じで重要伝統的建造物群保存地区を取り消されるかもしれないと言っていた。店舗も多く、看板やフラフを立てている場所で景観が整っていない。経済的には潤っているかもしれないが町並みを見るとしては魅力がない。また、重要伝統的建造物群保存地区を学んでいる専門家曰く、129件ある重要伝統的建造物群保存地区の中で10本の指に入るほど素晴らしいという。地元の人はあまり分かっていないかもしれないが、昔から住民が生活している場所が変わらず残っている場所は滅多にないという。こういった背景からあえて観光地化はする必要がない。しかし、発信はうまく行っていかないといけないと感じている。Facebook を発信するなどで、イベント情報を届ける。

5-2. 質問項目　地域住民(2025年8月23日~11月21日)

①吉良川地区でどのくらい暮しているか

81年、90年、70年、など長年住んでいる人が多い。

②吉良川地区の町並みについてどんな印象をもっているか

昔と変わらない町並みで昭和の佇まいのままで他の場所で住んで戻ってくると安心する。町並みの他にも人柄や気候もよく過ごしやすい。吉良川が穏やかで平和で大好きである。未だにこんなに過ごしやすいまちが残っていることに対して誇りに思っている。

③重要伝統的建造物群保存地区の指定を受けることは受け入れられたか

反対でも賛成でもなく指定を受けることに不安で始めは戸惑っていた。県外から訪れた人が町並みを気に入ってくれて褒めてくれたことやその意見に後押しされて吉良川の町並みの素晴らしさが分かって受け入れることができた。

④日常生活の中で町並み保存と関わることはあるか

日常生活の中でも町並み保存に関わる場面はある。建物を修理する際、昔と同じ方法で自由に直すことはできない。特に外観を変更する場合は、元の状態に近づける必要があり、その際は市へ届け出を出して許可を得る決まりになっている。

⑤保存活動やまちづくりに参加している人とそうでない人の間で意識の違いを感じるか

町並みの保存について昔なりの家づくりを反対する人もいる。保存して修理をした方にその方たちはあまりいい感情を持っていないでいる。

⑥町並み保存のために行政や保存会に望むことはあるか

家の外観を昔のまま修理するためには補助金があり行政のいうことも理解できるが住民の負担は大きい。この町で暮らすには住民自身にも経済的余裕や協力が必要だと感じている。選定当時は保存に賛成して協力していた住民も世代交代で状況が変わってきているため行政には「保存の意義」を継続的に説明してほしい。

⑦伝統的建造物の修繕・改修を行う際に困ったことやサポートしてほしいことはあるか

修繕したいと思っても「元の状態に直す」という厳しい条件があるためなかなか踏み切れず困っている。

⑧自分の家や建物を将来的に誰に引き継ぎたいと思うか

住民の子供の多くは県外に住んでいる。町並み保存のことや色々な話をしているが将来のことは分からない。空き家にならないことを祈っている。理想としては、自分の子孫に引き継いでもらいたい。

⑨町並みを残すうえで一番心配していることは何か

今のまいつまでもこの町並みの状態を望むが町並みに暮らす住民たちの高齢化になっていることを考えると、自分が育った町がどこまで続くのかと大変心配に思っている。

⑩保存を続けていくために今後必要だと思う支援はあるか

町並みの存続を見据えた補助金の問題、住民の理解の話し合いを密にしていきたい。

⑪「ふるさと市」や「ひなまつり」、「神祭」に関わって感じたことは何か

「ふるさと市」や「ひなまつり」は今まで関わってきた方の高齢化につき町民の皆さんが町に関わって頑張っている。「神祭」も町の若者が地元にいなく他の町より皆の応援でやっているがいつまで続くか心配している。

⑫若者・観光客に対して町のどんな部分を伝えたいか

御田祭が人口減少で衰退していっているのでそれを残していきたい。また、古い町並みや家の価値を分かってもらい残していきたい。今の若い人は近代的な家を建てたい人が多い。昔の様式の家を建てないといけないことに不満を持っている人もいた。新築の近代的な家が吉良川地区に何軒か建っていて、吉良川の町並みの価値を分かってもらえなかった。若い人たちにとっては住みにくい町かもしれない。

⑬若い世代が吉良川で暮らし続けるために何が必要だと思うか

若い世代が暮らすにはこの地域で生活できるだけの仕事や産業が必要で親も子供も安心して暮らせる環境が重要である。特に「働ける場所」を与えてやりたいと強く思っている。

⑭昔の建物が持つ構造的な強さ・弱さについて感じていることはあるか

昔の家は土台や石が古く、地震でずれ、屋根に重い瓦が多く乗っているため、修理の負担がとても大きい。昔ながらの方法で直そうとすると古い木材の上にさらに重い瓦を載せ直す必要があり、家主としては経済的にも体力的にも非常に大変である。町並みを残すことは大切だが、「昔ながら」だけにこだわらず、もう少し現代に合った修理方法を研究してほしいと感じている。

⑮歴史的な町並み・保存についてどのように感じているか

平凡で昔の暮らしが今もできることが嬉しい。吉良川地区は質素でスケールの大きなものはないが吉良川地区に生まれてよかったと感じている。

5-3. 質問項目　室戸市役所(2025.8.26~12.5)

① 町並み保存に関して、市としてどのような支援を行っているのか

保存活用事業遂行に当たっては、市教育委員会、市当局のほか、保存地区の住民等により組織された保存団体が協力して進めている。また、関係機関・諸団体・学識経験者・専門家・技術者・ヘリテージマネージャーなどとの広範な協力・支援を築いていく。年に 1 度吉良川町で伝統的建造物の審議会が行われている。伝統的建造物の特定の審議や修理内容についての協議を行っている。

②改修工事に対する補助金額や制度はどのようなものがあるか。

・修理事業

経年劣化により損傷や改変等がなされた特定物件について、外観の本来の特性を維持または回復するための行為。また、修理する際には建物の耐震改修をするように行っている。伝統的建造物の場合、1958 年以降の建物は耐震設計が低いため、修理の時は必ず耐震をするよう心掛けている。

・修景事業

特定物件以外の建築物や工作物に対して、周囲の特定物件の特性を踏まえながら、外観を伝統的な町並みに調査させる行為。外観については修景基準に従う。市の協議において、やむを得ないと判断された場合は取り壊し可能。

・補助金について

〈特定物件の金額〉

主屋・土蔵→補助率 4/5 以内上限 800 万円
附属屋・工作物→補助率 4/5 以内上限 300 万円
塀・門・石垣・井戸→補助率 4/5 以内上限 400 万円
環境物件→補助率 4/5 以内上限 400 万円
鳥虫害等防除、自動火災報知機等→2/3 以内　50 万円円
〈特定物件ではない建造物〉
・修景事業
特定物件以外の建築物や工作物に対して、周囲の特定物件の特性を踏まえながら、外観を伝統的な町並みに調和させる行為。
・外観については修景基準に従う。
・市の協業において、やむを得ない判断された場合は取り壊し可能。
・公道やその他の公共の場所から見える範囲のみの補助対象とする。
〈特定物件以外の補助金額〉
主屋・土蔵→補助率 2/3 以内上限 500 万円
附属屋・工作物→補助率 2/3 以内上限 100 万円
石積み(いしぐろ等)・板塀→補助率 2/3 以内 400 万円
③修理補助金の利用状況について
今年度の修理・修景事業合わせて 9 件、金額 41,105,000 円
③室戸市役所ではどのような予算をかけることができるのか
・伝統的建造物特定物件
・非特定物件
・管理施設等
・環境整備
・まちなみ(イベント)
④保存活動で直面している課題や行政としての悩みはあるか
・保存活用計画の見直し(令和 6 年度 12 月 20 日改正)
⑤重要伝統的建造物群保存地区の指定を受けることに反対意見はなかったか
「お答えすることができない」という回答を得た。
⑥これまで行ったイベントの効果
・吉良川のひなまつり令和 6 年度 3 月 1 日(金)～3 日(日)
【どこから来ましたかアンケート】
・高知県内 131 人・高知県外 30 人
良かったこと
・着物に着替えて町並みを散歩することの効果が大きかった。
・能登半島の震災のこともあってか、防災食の提供が好評だった。
・住民からとても好評だった。

⑦他の伝統的建造物群保存地区の取り組みを導入する予定はあるか
特になし。
⑧空き家の有無や利用方針
空き家バンクに登録して、移住促進を図る。
⑨若い世代の定住・移住促進に向けた取り組みはあるか
「お答えすることができない」という回答を得た。
⑩住民と市役所が連携して取り組んでいる活動はあるか
・学校での教育活動や生涯学習活動を通した普及啓発
・保存地区の価値や魅力を分かりやすく周知情報の発信
・町並みの歴史的な雰囲気と調和したイベント等の開催
・住民による来訪者のもてなし契機とした交流促進
・農林水産業などの地域産業と観光業との結びつけによる商業活動の活性化
室戸市活性化のために、他の課との連携をもち、観光業を発展していくところである。
⑪市として今後吉良川地区をどのように活かしていきたいか
・町並み保存意識の醸成
・公共施設等の整備
・公開・活用施設の充実
室戸市は人口減少が続いていて今後 10 年で空き家対策が最も重視されている。
若手育成のために伝統的建造物の修理をしていただく大工・設計士を育成するためにヘリテージマネージャーの養成育成を実施している。
⑫今まで学校や大学と連携したことや大学の研究室などから問い合わせがあったとしたら、どこから、どの程度か
大学生の卒業研究として室戸市はどのようなことをしているか回答している。またヘリテージマネージャーの建築士育成のために高知工業高等専門学校・筑波大学も関わっている。
⑬学生への研究・活動に期待することや協力できることはあるか
学校での教育活動や生涯学習活動を通した普及啓発。研究した内容等を発表して、色々な方に吉良川地区を知ってもらいたい。

6. まとめ

6-1. 町並み保存会から分かったこと

本調査から町並み保存会からは高齢化・担い手不足・行政との滞りが大きな課題となっていることが分かった。現在、イベントは高齢化で人手不足が原因で苦労していることが分かった。来訪者が減少しているだけでなく、準備の負担が高齢世代に集中している。また、現在得ている国からの保存会の維持・活動費では足りていない。これらの課題は先行研究のすべての地域と事前調査の「伝統的建造物群保存地区制度創設 50 周年記念シンポジウム～まちなみを紡ぐ人々のあゆみ～」の講演会で学んだ地域から一致する全国的な課題だと分かった。先行研究の「広島県呉市豊町御手洗における　地域づくりに参画する関係人口に関す

る研究」では空き家を関係人口に値する人に空き家を貸して地域活性化に繋がっていることが分かった。吉良川地区にも定住して住みたいという人がいて、貸す家もあるという点は一致している。しかし、室戸市が修理費用をかけてくれなく移住促進をしたいというものの行動に移してくれないために家を貸す段階に至っていない。これは長年の問題であり、事態が行き留まっていて保存会としては何もできない。情報伝達がうまくできていない状態だといえる。吉良川地区では観光地化を全く目指していなく、現状維持をしていきたいといった点が他の重要伝統的建造物群保存地区の地域と異なることが分かった。他の重要伝統的建造物群保存地区が観光地化により人が溢れかえり、景観が乱れていることを見ていると「吉良川では同じようになりたくない」という意識が生まれており、吉良川の落ち着いた町並みが地域の誇りとして強く認識されていることを示した。また、吉良川地区で行われている地元小学生に向けた地域学習や吉良川地区での防災訓練は積極的に行われている。特に小学生に向けた地域学習は学校教育を通して学ぶ意欲的な姿勢が地域の未来の担い手を育てる重要な基盤になっているといえるだろう。

6-2. 地域住民から分かったこと

本調査から地域住民からは「次世代への存続の不安」と「町並みへの愛着」の双方を抱えながら生活をしていることが分かった。人口減少や住民の高齢化による後継ぎ問題や若者に対しての理解、暮らしやすさについてとても心配している。また、先行研究の「増田重要伝統的建造物群保存地区の維持・継承に関する基礎研究」では建物の継承者は決まっているが継承者の帰郷予定が決まっていないことが課題として示された。吉良川地区でも同様に自分たちの家を子孫に家を継いでもらいたいという意思はある。吉良川地区の現状では継承者も継承者の帰郷予定もどちらも決まっていないことが分かった。家の継承に対して将来自分の家がどうなるか分からないという先が見えない不安が生じている点が一致している。

先行研究の「重要伝統的建造物群保存地区における町並み保存の取り組みと住民意識：群馬県吾妻郡中之条町赤岩地区を事例に」では住民同士の繋がりの弱さや今後の町並み保存の在り方、福祉制度や雇用の場がもっと必要だと示されている。吉良川地区で集まって頂いた地域住民の方は全員がとても仲良く吉良川地区のことを「大好きだ」、「吉良川地区に生まれてよかった」と口を揃えて言っていたのが印象的であった。中には奈良県出身で奈良県と吉良川地区を往復している人もいた。吉良川地区の住民に溶け込んでいて、吉良川地区は優しい人が多く、昔のままで町が落ち着いているととても気に入っていた。昔から何も変わらない町並みの吉良川地区で暮らせていることを誇りに思っている。また、保存会の方への調査でも吉良川地区の地元の繋がりは強いものだと分かっている。この点は先行研究の赤岩地区と異なる点である。その反面、補助金の少なさ、町並み保存の在り方、福祉制度や雇用の場を設けてほしいといった点は吉良川地区でも一致している。地域住民の回答から、「町並みは守りたい」という一方で補助金の少なさや「元の状態に戻す」という厳しい条件があるので修繕を諦めるといった事態になっていることが分かった。地域住民は世代間におけ

る町並み保存の価値観の違いを危惧している。町並みを無視して近代的な家が何軒か建ったことや若い世代の居住継続のために働く場所を設けてほしいと望んでいる。赤岩地区と同様に世代交代で町並み保存の意識が少なくなっていることを恐れている。そのため、「保存の意義」を継続的に説明していくことが今後重要である。

6-3. 市役所から分かったこと

本調査から吉良川地区の町並み保存における行政の取り組みと課題が明らかになった。先行研究の「歴史的街並み景観にみられる地域アイデンティティの創出メカニズム」では市役所と住民が一体となり、対策をとることで歴史的街並み景観を保全することができると考えられている。吉良川地区でも同様に住民と市役所が連携した取り組みが行われていることが分かった。特に毎年開催される「ひなまつり」は住民から好評を得ており、住民と市役所の協働を実感できる。また、これからの将来を見据えて高等専門学校や大学を交えてヘリテージマネージャーの大工、設計士、建築士の育成を行っており、地域資源を継承しようとする姿勢が確認できる。さらに、農林水産業や地域産業と観光の結びつきによる商業活性化を図ろうとしており、景観保全と地域経済の両立が求められている。

7. 結論

本研究で行ったフィールドワークとインタビュー調査により他地域と比較しても住民同士のつながりがかなり強く、町並みを誇りに思い、愛していることが分かった。保存会や住民は日常生活の延長として町並みを守る意識が高く、観光地化を望んでいない。また、市役所も観光業を発展させて地域経済を活性化させたいという思いはあるが観光地化を目指して観光客がたくさん来ることを望むという意向は示されなかった。一方で、保存会・住民と市役所の間には意識のズレがあるということが分かった。若い世代の移住促進を保存会、住民、市役所も考えていて家主に了承を得て貸す家も貸す人もいる。それに対し、市から頼まれている貸すことのできる家のアンケートに回答をしたものの、返事が返ってこないといった課題が両者間に滞りが生じている。

しかし、住民が望む「今の町並みを守りたい」ということはいくつかの条件が揃えば可能である。家の譲り手が確保され空き家化が防げること、若い世代に保存意識が浸透し担い手が育つことである。さらに市役所が将来を見据えた取り組みを行っており、ヘリテージマネージャーを育成することなどである。また、保存会・住民と市役所間や世代間の意識のズレを調整することで今の町並みの持続的な保存に繋がると考えられるだろう。

参考文献

・FURUSATO：【室戸市】重要伝統的建造物保存地区「吉良川のまちなみ」を継承する、https://www.furusato-web.jp、2024年4月28日
・高知県観光ガイド連絡協議会：特定非営利活動法人　吉良川　町並み保存会、https://kochikankoguide.jp、2018年5月
・室戸市ホームページ：吉良川のまちなみ、https://www.city.muroto.kochi. jp、2019年
・室戸市ホームページ：民家の技術とデザイン、https://www.city.muroto.kochi.jp、2025年11月17日閲覧
・室戸市ホームページ：吉良川町、https://www.city.muroto.kochi.jp、2025年11月17日閲覧
・文化庁：室戸市吉良川(高知県)、https://www.bunka.go.jp、令和２年５月
・文化庁：室戸市吉良川町（高知県)、https://www.bunka.go.jp、令和6年5月
・文化庁：地域の宝を未来へつなぐ、https://www.bunka.go.jp、54ページ、令和3年1月
・文化庁:伝統的建造物群保存地区制度創設50周年記念シンポジウム「まちなみを紡ぐ人々のあゆみ」を開催します、https://www.bunka.go.jp、2025年６月23日
・田舎マップ:吉良川の町並み｜高知県室戸市-田舎マップ、https://muroto.inakamap.jp、2025年6月20日閲覧
・高知旅ネット:吉良川の町並み｜観光スポット検索、https://kochi-tabi.jp、2025年6月21日
・田中真琴、中川秀幸、根岸洋：増田重要伝統的建造物群保存地区の維持・継承に関する基礎研究、国際教養大学アジア地域研究連携機構研究紀要、7 巻、51-61、2018 年、https://doi.org/10.24687/iasrc.7.0_51
・伊藤智樹:広島県呉市豊町御手洗における 地域づくりに参画する関係人口に関する研究、日本地理学会発表要旨集、https://doi.org/10.14866/ajg.2022s.0_134 (2025年11月19日閲覧)
・斎尾直子、寺尾慈明：歴史的町並みを活用したまちづくり実施地区における地域居住の維持　重要伝統的建造物群保存地区と未選定地区との比較分析、日本建築学会計画系論文集、79巻695号、p131-139、2014年、https://doi.org/10.3130/aija.79131
・帳紅：歴史的町並み景観にみられる地域アイデンティティの創出メカニズム、日本地理学会発表要旨集、https://doi.org/10.14866/ajg.2019a.0_149、(2025年11月20日閲覧)
・三枝賢太、重要伝統的建造物群保存地区における町並み　保存の取り組みと住民意識：群馬県中之条町赤岩地区を事例に、法政大学地理学会、法政地理、44巻、43-54、2012年3月22日、https://hosei.ecats-library.jp